

健康文化

只今患者です

今井田 二三子

時には患者になって病む人の苦痛と病む人の心理を自ら体験するようという天の配慮とでも申しましょうか、私は二十年に一回ほどの割合で余儀なく入院するはめになるのです。第一回目は学生時代の結核、第二回目は病院勤務の頃の肝炎、その後の二十数年の間は何事もなく過ぎてきましたが、今年の正月二日のことです、恙なく一日が終わりテレビの正月番組をゆっくり楽しむことにしようとホーム炬燵の前に座ったところ左の足の関節に鈍い痛みの走るのを感じました。以前、皮膚疾患の講演の際、レーノー症状の中には膠原病のこともあると聞いたような朧な記憶が頭をかすめ、寒冷時手指の蒼白化が次第に強くなってきているため、若しかして関節リウマチの始まりではないかという思いが頭の隅に浮かびましたが、何時しかテレビの番組に心を奪われその思いは消え去ってしまいました。しかし翌日も痛みは続き更に左足関節の腫れているのに気付きました。

人は生涯に幾度となく病に罹ることがあるが、そのほとんどは治るもの、治らない一つを見落としてはならないのと、治る病にしてもその身体的、精神的苦痛を如何に軽くするかが私のつとめと任じているものの、自分のこととなると最後の一つの病気でない限りいづれ治るものと頭から決め込んで、たいして気にもしていませんでした。しかし翌々日になっても痛みと腫れは増すばかりで五日目になり友人の薦めもあって外科を訪れました。その結果、腫れた足関節は無惨にも切開され、ガーゼを詰められるはめになりました。「化膿性滑液囊炎でしょう」と告げられました。

切開を受けたその日は少し腫れが引いたかと思われましたが翌日には再び腫れは増し、恰も象の脚の如く、皮膚の色調まで象の皮膚の様相を呈してきました。もう明日の朝には少しは苦痛が薄らぐのではないかというはかない期待は消え失せ、明日の診療時、この脚をどの位置に置いたら痛みを和らげることができるかという思いが頭の中を占拠し、また診療時には患者さんの訴え

を聞きながら、今、この患者さんの苦痛と私の脚の痛みとどちらの苦痛が強いのだろうかなどと、けしからぬ思いが浮かんだりもしました。隣の部屋まで行くのに、その昔振り分け荷物を肩に江戸に旅立ちをするほどの決心のいるのに音をあげ、「せめて土曜日の午後から日曜日にかけて入院をされてはどうか」と言われた主治医である外科部長の T 先生の言葉に「ノー」と言う気はなくついにベッドの上の人になりました。

T 先生は、切開後の外来通院中も午後、夜の二回に亘り、手術中でないときは自らガーゼ交換を行って下さいましたし、入院後も、夜の回診時には私の部屋を訪れて、何げない一言に患者の心を掬いあげるような言葉をかけて下さいました。

疑問、困ったことがあったら何でも言って下さい、と診療計画書の最後に添えられた一行に患者への温かく細やかな心遣いが感じられ、私自身の日頃の患者さんへの接し方を深く反省させられました。看護婦さんの柔和な笑顔、少し速度を落とした優しい話され方は心まで弱くなった患者にとって大変慰められる思いがしました。

一週間後、外来への通院の許しを願って T 先生の不安気な眼差しを背中に感じながら一センチメートルほど細くなった左下肢をさげて病院を後にしました。

外科医であるのに患者の心を汲んで温かく包んで下さるような T 先生、天使のような笑顔の看護婦さんより受けた多くの心遣いに、お返しをする機会はずがないものと思われませんが、この方々から受けたものを、これから先私の所へ訪れられる患者さんに返し続けてゆこうと深く心に決めました。

(内科開業医)